

泉鏡花『五大力』論

—— 毘沙門・不動二仏の救済 ——

諸岡哲也

〔抄録〕

鏡花文学には仏教的なものが基底に存在しているが、泉鏡花と仏教の関係については重要な要素であると考えられるが、これまであまり深く論じられることがなかった。『五大力』にも、題名からうかがえるように、仏教的な要素が見られる。そこで本稿では、仏教的視点から作品を読み解くことで、『五大力』は毘沙門

天と不動明王によって登場人物が救済される物語として解釈できることを示し、ひいては鏡花の仏教観の一端を明らかにする。

キーワード 泉鏡花、五大力、仏教、毘沙門天、不動明王

はじめに

泉鏡花の『五大力』は大正二年一月、『新小説』に発表され、翌三年七月に作品集『相合傘』（鳳鳴社）に収録された。この作品は一般的にはあまり知られていないと考えられるので、具体的に論じる前にここで念のため、少し長くなるがあらすじを記しておく。

深川洲崎の遊郭の帰途、堀小彌太は茶飯屋梅川へ車夫の松と共に寄る。そこで茶飯屋の親仁と松に去年霜月に起きた出来事を語る。

小彌太はある絵師から能楽師である叔父の新海孫六兵衛に借りてい

たという、浮草小町という名の泣増の能面を、叔父に返しておいてほしいとその絵師から預かる。その絵師の家を出ると、雨が降り出した。小彌太は降り続く雨の中を歩いていると、突然女性に声をかけられる。女性は自分のことを知っているようだが、小彌太はどうしても思い出せない。その女性は顔も姿も雨と傘のせいかわからない。小彌太は女性と確認のやりとりをするが、女性ははぐらかすばかりである。女性の頭が見えた時、なぜか女性は小彌太に顔を背けていた。その女性は昔なじみの遊女で、バセドー病に罹っていると言いつつ、梅川だと小彌太が思い出すと、女性は突然失礼すると言いつつ

去つてしまふ。と、気が付くと浮草小町の面が小彌太の手元から無くなつていた。あの梅川らしい女性に盗られたのかと小彌太が思つてみると、目の前の川に小舟を多数引き連れた、川施餓鬼をしている巨大な五大力船が出現した。その船に自分の手足・乳房がとれて落ちると笑いながら水面を覗く、発狂している円鬚の美しい女性がいた。

さて、浮草小町の面を無くしたために、叔父の家に寄りあぐねていた小彌太だったが、孫六兵衛が怪我をしたことを聞きつけかけつける。それほどの怪我でもないことに小彌太は安堵するが、孫六兵衛から面はどうしたと質問され答えられず、いたたまれなくなつてぶらぶらして今に至る、とその二人に話すのだった。

話し終わり、小彌太が茶飯屋梅川を引き上げようとすると、眠つてしまつていた車夫の松が、寒詣りをしている弁才天の夢を見たと言ひ目覚める。すると現実に店の前を冬木の弁才天と呼ばれる美しい女性が歩いてゐた。その月岡霞と呼ばれる女性は、小彌太が無くしたはずの浮草小町の面を顔に着けていた。小彌太は面の行方を追つてその霞の後をつける。後をつけている小彌太に気付いた霞は、自分が醜い顔の女性ではないと小彌太に言う。

場面は変わり、孫六兵衛の家へ戻つた小彌太は、霞と遊女梅川との関係と事情について孫六兵衛に語り出す。それは霞は弁天様と呼ばれるほど美しい女性であつた。一方の遊女梅川は、バセドー病治癒のため弁天堂へ熱心に参拝していた。それを同情した霞は、弁才天に扮して梅川に病氣平癒を約束する。本物の弁才天からのお告げだと信じていた梅川だったが、それが実は霞の演技だったことを知ると、怒りで

入水自殺をしてしまふ。霞は梅川の死体を見たことから、自分も同じような醜い顔になると不安になり、恐怖から発狂してしまふ。霞は手に入れた浮草小町の面を寝る時も顔に身に着け、決して離そうとはしなかつた。そこで語ると小彌太は、霞のために浮草小町の面を与えてやつてほしいと、孫六兵衛に懇願する。孫六兵衛は、霞が他の能面の中から、浮草小町を見事に当てるのが出来たら、望みを叶えるという条件で承諾する。後日、それは能舞台で行われた。霞は浮草小町の面を見事に見抜き、正気へと戻つた。以上である。

さて、先行研究を見ると、増田正造氏は『朝湯』『卵塔場の天女』とともに『五大力』を取り上げているが、あらずじと作品の紹介といった程度にとどまつてゐる。^①三田英彬氏は女性が美しくありたいとする願いとどこまでも美しくあるべきだという願ひが根本にあるとし、女性一般がこうあるべきであるという願望を描いていると論じる。それにより「能楽全体の芸の美と、女性が迫り求める美しさを相乗させて、一層の芸至上を見極められる作品」と捉えている。^②また、久保田淳氏は『芍薬の歌』等の『五大力』を含めた「深川物」を対象に、鏡花における悪所の意味を考察し、深川は「州崎という悪所とある種のアジールとを共に殖し」た「異界」であり「魔界を現出させる土地」であると結論づける。^③さらに脇純子氏は能楽小説とでも呼んでも良い能・狂言を扱った作品を鏡花文学における一系統として体系的に論じられてこなかつたことを指摘し、『五大力』『歌行燈』等それらを比較検討することで、鏡花の芸能がどのように形成・変質しているかを明らかにしている。そして、鏡花の芸能は「同じように繰り返され

る性質のものではなく、「過去を再現し、主人公の運命を変える」ものであるとし、芸能に運命を変化させる力を与えると結論づける。

『五大力』については、能面・芸の力・能楽師の力によって狂気からの目覚め・魂の救済及び鎮魂・至芸獲得を指摘している。^④弦巻克二氏は鏡花の「女役者」という言葉に着目し、「女優」という言葉に鏡花が軽薄さ・傲慢さを感じ取っていたことを指摘し、自然主義や大正デモクラシーといった当時の時代背景との関連から、「女役者」というものに職人的芸への讃美があったと論じる。『五大力』についての指摘に関しては、霞が孫六兵衛に救済されることが新時代の女優よりも昔ながらの能・狂言役者が上位にくるという位階構造が鏡花の中にあつたことを論じ、芸を示さず軽薄・傲慢ゆえに弾劾されるべき霞が救済される理由をその視点へと置く。^⑤以上が先行研究における『五大力』評価である。

このように先行研究を概観してみると、まず一つ目として目に付くのは『五大力』単一で論じているものが三田氏のものだけであるという点である。その他の論者は『五大力』以外の作品とからめて論じている。二つ目としては、先述の脇氏の「能楽小説」という呼び名に象徴されるように能・狂言からの視点によって作品を論じている点である。鏡花文学における能・狂言の影響関係については、今さら指摘するまでもないことであるが、先行研究においてもその研究史の流れの中で論じているもののように見える。もちろん、そのような影響関係について指摘することについては意義のあることであるし、当然筆者としても否定するものではない。しかし、その他にも『五大力』につ

いて論じられていない部分が存在するのではないだろうか。それは仏教的視点からの論である。『五大力』に限ったことではないが、鏡花文学には仏教的なものが基底に存在していることに異論はないと考えられる。鏡花と仏教の関係については重要な要素であると考えられるが、これまであまり深く論じられることがなかったのではないだろうか。^⑦

そこで本稿によって、『五大力』を通じて鏡花文学における仏教の影響についてその一端を明らかにする端緒とできればと思う。まず論を展開するに先立ち、確認しておきたい事柄がある。先程も見てきたように『五大力』を論じる先行研究自体が少なく、なおかつ単一で論じられているものは唯一つである。そのような作品を改めて論じることに意味があるのかとの疑問は当然の如く沸き起こるだろう。だが、それは能・狂言的視点から論じた場合であつて、仏教的視点より論じるならば十分に単一作品として論じるに値するものであると筆者は考えるものである。それでは、ここから具体的な論へと進めてみると、作品最終場面で孫六兵衛が毘沙門天として表現されている。毘沙門天の力を借りることで霞は正気に戻り、救済されたと捉えることができるだろう。新たに再生された霞は毘沙門天とさらには不動明王に同定された孫六兵衛の力を借りることで救済される物語として読めるのではないだろうか。以下、そのことについて考察する。

一、孫六兵衛と毘沙門天

ここでは、孫六兵衛と毘沙門天のかかわりについて見てみようと思う。先ほど触れた最終場面には、具体的には次のように表現されて

いる。

古稀を過ぎた若旦那、健かに腰を切つて、映るを見よとか、姿見に、舞扇子を屹と霞に向けて、肅然として立つたる有様、修羅八万の矢表に、毘沙門天が黄金の楯。

（三十三 傍線部分は引用者。）

「古稀を過ぎた若旦那」と表現されている人物が当然、孫六兵衛である。その孫六兵衛が毘沙門天と表現されている。孫六兵衛が毘沙門天と表現されている箇所は、作品を通じてこの引用部分のみである。なぜここで突然、毘沙門天が現れるのか。霞が弁才天として象徴されることから、例えば七福神などで共に祀られる毘沙門天に孫六兵衛が同定されたと考えられなくもないが、そのような単純なものではないだろう。

そもそも毘沙門天とはどのような神仏なのか。ここで簡単に確認しておきたい。毘沙門天はサンスクリット語でヴァイシュラヴァナといひ、毘舍羅婆拏、吠室羅末拏、毘舍羅門とも音写される。日本ではそのヴァイシュラヴァナに漢字の音を当てはめた毘沙門天と、その意味とされる釈尊の説法を数多く聞いた者を漢訳した多聞天との二つの名で知られている。毘沙門天は東方の持国天、南方の増長天、西方の広目天とともに四天王の一つとして、北方の守護神とされている。そして日本では、四天王の一人として呼ぶ時は多聞天、単独で信仰される時は毘沙門天と呼ばれることが多い。諸々の衆生を利益し、安樂にし

て、財宝を豊かにするためと国土守護が功德の二本柱である。⁽⁸⁾

このような性格の毘沙門天であるが、では孫六兵衛とどのように関わっているのだろうか。鈴木喜博氏によれば、毘沙門天と不動明王は本尊の尊種に関係なく、共にその左右に配置され、一種の協侍的・守護神的な性格をもった組み合わせとして、主に天台系寺院に多く祀られてきた。特に、本尊が観音菩薩の場合、観音三十三応現身説によつて観音菩薩と毘沙門天との結びつきは強く、毘沙門天が脇侍として祀られることにも説明がつく。また、観音・毘沙門団体論もその説明の補強となる。観音三十三応現身説とは、『法華経』『普門品』に説かれているもので、観音がこの娑婆世界に出現し、危難にある衆生を救う方便として天上・人間・阿修羅・聖者・賢人・王侯・長者・実業家・婦人・小児等あわせて三十三身にそれぞれ変化し、法を説き、衆生を救うことをいう。毘沙門天は、このようにして観音が変化する三十三身の一つに属している。つまり、観音は臨機応変に変化し、諸々の法を説き、衆生を救済するのである。⁽⁹⁾鏡花は『法華経』の熱心な読者であり、当然、観音三十三応現身説についても理解していたことだろう。また、「おぼけずきのいはれ少々と処女作」（明治四十年五月）において「一を観音力、他を鬼神力」と呼んでいたことを考えれば、毘沙門天と観音菩薩を結びつけることは容易なことだっただろう。月岡霞の救済といった物語の基本構造に仏教的要素を加え、孫六兵衛を毘沙門天ひいては観音菩薩の象徴として物語内に出現させ、霞を仏教的救済へと導く物語としたのではないだろうか。

以上、孫六兵衛が毘沙門天として象徴されている意味を考察し、毘

沙門天による震の救済の物語であることを見てきた。次節では、孫六兵衛が不動明王に同定されていることについて見ていきたい。

二、孫六兵衛と不動明王

さて、この節では孫六兵衛が不動明王に同定されていることについて確認していきたい。ここでもまず、少々煩わしくはあるが、念のため簡単に不動明王について確認しておきたい。

不動明王は五大明王の中で中心的な位置にあり、さらに数ある明王の中でも最も重要な尊格である。大日如来と相並んで最も広く祀られ、一切の悪魔を降伏する大威勢の尊格である。サンスクリット語で「アチャラ」（不動）あるいは「アチャラナータ」（不動尊）という。不動は如来の使いとして種々の用務に給仕し、真言の行者を守護する。そのため、不動使者と呼ばれることもある。また、如来の使いと同時に忿怒尊としての性格も強調される。日本での信仰は、空海より始まる。当初は鎮護国家を祈る五大明王の信仰と共に展開し、後には一門の繁栄や息災安穩を願う貴族たちの間に広がった。観音菩薩・地藏菩薩と並んで、今日に至るまで最も親しまれてきた尊格である^⑩。

以上、確認してきたが、孫六兵衛が不動明王に同定されていることについて、やはり先程の毘沙門・不動の協侍が注目される。不動が共に協侍として祀られることについては、先述の鈴木氏は序説という性格のためか、残念ながら論じられていない^⑪。管見のかぎりでも、なぜ不動が毘沙門と共に協侍として祀られるのか、詳細は不明であった。しかしながら、今野本證氏によれば、真言密教では、毘沙門天は他の

天部と区別され、大日如来が変化した権天であると指摘している^⑫。であるならば、真言密教では不動明王も大日如来の化身とされていることを考えれば、共に祀られていることも理解できる。そもそも大日如来はすべてのものの根本とされていることからすれば、当然のこととも言える。このように、観音三十三応現身説による毘沙門天と本尊（観音菩薩）、大日如来と不動明王とのつながりという複雑な構造による鏡花独自の仏教理解によって、孫六兵衛は毘沙門天と不動明王に象徴されているのではないだろうか。

また、作品内においても第五章で「不動堂」との記述があり、「鈴の音」と共に「懺悔々々」「六根清浄」と唱える声が聞こえる。この「不動堂」は現在の成田山東京別院深川不動堂のことと考えられる。深川不動堂は開創元禄十六年とされ、成田山の本尊を江戸に奉持し特別拝観したことに始まる。明治になり神仏分離令と廃仏運動の中で、不動明王の分霊を移した。深川不動堂として堂宇が完成したのは、明治十四年のことで関東大震災や第二次大戦を経て現在に至る^⑬。さらに、「六根清浄」は眼・耳・鼻・舌・身・意の六根を清浄にすることを意味し、真言宗では登山等に際してこれを唱え安全を祈る。天台宗でも『法華経』に基づき、これを修行の位として六根清浄位と呼んでいる^⑭。以上のことをふまえると、孫六兵衛と不動明王とのかかわりもおそらく偶然ではないだろう。密教や不動明王といったものが複雑に絡まっていると考えられるのである。もう一つ付け加えると、作品内には四天王と呼ばれる四人の能楽師が登場する。五大力船に乗って震が登場するところから、この四天王と孫六兵衛を合わせて五大力菩薩による

救済と脇氏は指摘している^⑮。当然、五大力船とその五人の菩薩という読みは可能だろう。しかしながら、それだけではなくこの五大には、五大明王による救済の意味も含まれていると考えられないだろうか。孫六兵衛が不動明王の象徴として描かれているとすれば、その四天王を含めて五大明王の一人として描かれていると考えられる。さらに、その四天王の中心にいるのが孫六兵衛であるならば、孫六兵衛は当然五大明王の筆頭、不動明王として描かれていると考えられるのである。このように、孫六兵衛は毘沙門天と共に不動明王としても描かれ、霞を救済する存在として作品内に登場していると考えられる。

結 論

以上、確認してきたように孫六兵衛は、毘沙門天として作品内に描かれていた。それは、不動明王と共に本尊の脇侍として祀られることから、『法華経』『普門品』に説かれている観音三十三応現身説によって、毘沙門天、ひいては観音菩薩による霞の救済としての役割を与えられており、同様に真言密教では不動明王・毘沙門天は大日如來の化身とされていることから深いつながりがあり、そのため孫六兵衛は不動明王とも同定されていると考えられるのである。さらに、四天王と孫六兵衛を合わせた五大明王の筆頭、つまり不動明王としての意味合いも重ね合わされている。『五大力』には五大力菩薩による救済という意味合いだけではなく、五大明王による五大力という意味合いも重ね合わされているのである。『法華経』『普門品』による観音三十三応現身説の毘沙門天―観音菩薩による霞の救済と、不動明王―大日如來

による霞の救済という仏教による二重の救済の方法が、孫六兵衛を通じて表現されていると考えられるのである。このように『五大力』という作品は、複雑に絡み合った鏡花独自の仏教的救済が描かれた作品なのだと考えられる。

〔注〕

- (1) 増田正造「近代文学と能」¹⁵ 泉鏡花『五大力』『朝湯』『卵塔場の天女』（『観世』第五十四卷第八号 一九八七（昭和六十二）年八月一日）
- (2) 三田英彬「『五大力』の唯美主義」（『反近代の文学 泉鏡花・川端康成』おうふう 一九九九（平成十一）年五月三十日初版発行。初出『湘南短期大学紀要』第三卷第一号 一九九二（平成四）年三月二十日）
- (3) 久保田淳「悪所と魔界―泉鏡花の「深川物」を例として―」（『国語と国文学』第七十卷第十一号 一九九三（平成五）年十月一日）
- (4) 脇純子「鏡花の能楽小説考」（『国文学論叢』第三十九輯 一九九四（平成六）年二月一日）
- (5) 弦巻克二「鏡花の描く「女優」（『叙説』第三号 二〇〇三（平成十五）年十二月一日）
- (6) 例えば、吉田精一『浪漫主義の研究』（東京堂出版 一九七〇（昭和四十五）年八月二十五日初版）、村松定孝『泉鏡花』（寧楽書房 一九六六（昭和四十一）年四月十五日）、脇明子『増補 幻想の論理』（沖積舎 一九九二（平成四）年十一月三十日）、笠原伸夫『泉鏡花美とエロスの構造』（至文堂 一九七六（昭和五十一）年十一月三十日）など多数。
- (7) 約一四〇〇本程ある鏡花に関する先行研究の中で、鏡花と仏教あるいは宗教との関係性について論じたものは、管見のかぎりでは古賀哲二「幻想文学における宗教的意識―泉鏡花の場合」（『国文科論集』第五号 一九八三（昭和五十八）年三月）、川端俊英「泉鏡花『妖剣

紀聞」について」(『同朋学園佛教文化研究所紀要』第七・八合併号一九八六(昭和六十一)年七月十日)、椿實「泉鏡花の宗教意識」(『宗教研究』第六十一巻第四輯 一九八八(昭和六十三)年三月三十一日)、須田千里「龍女と摩耶夫人―鏡花における仏教―」(『國語國文』第六十六巻第六号 一九九七(平成九)年六月二十五日)、谷川恵一「泉鏡花―他生の記憶」(『岩波講座 日本文学と仏教』第十巻「近代文学と仏教 第四章」岩波書店 一九九九年(平成十一)年七月五日)、田中励儀「泉鏡花「松の葉」考―自筆原稿から窺えること」(『鏡花研究』第十三号 二〇一三(平成二五)年三月三十一日)、藤澤秀幸「幸田露伴・泉鏡花における「死」と「救済」」(『清泉女子大学人文科学研究所紀要』第三十六号 二〇一五(平成二十七)年三月三十一日)など数少ない。

(8) 毘沙門天については、橋本章彦「毘沙門天と念仏―仏法守護神から福神へ―」(『佛教私学研究』第三十三巻第一号 一九九〇(平成二年七月三十一日)、伊東史朗「調査報告」幡豆町龍藏院の聖観音・毘沙門天・不動明王像―毘沙門・不動組合せの一古例―」(『愛知県史研究』第十三号 二〇〇九(平成二一)年三月三十一日)、田中千穂「毘沙門天と福」(『御影史学論集』第五号 一九七九(昭和五十四)年十月一日)、北口英雄「木造阿彌陀三尊像と不動明王・毘沙門天像」(『國華』第一三三九号 二〇〇七(平成一九)年五月二十日)等、多数参照させて頂き、学恩を賜った。

(9) 鈴木喜博「毘沙門天信仰の一形態について―不動・毘沙門研究序説―」(『仏教芸術』第一四九号 一九八三(昭和五十八)年七月三十日)。今回、鈴木氏の論から多くの学恩を賜った。この場をお借りして、感謝申し上げる。

(10) 不動明王についても乾仁志「不動明王」(『大法輪』第八十一巻八号二〇一四(平成二六)年八月一日)、駄南道人「佛像巡礼(3) 不動明王」(『佛教思潮』第四巻第八号 一九五一(昭和二六)年九月一日)、松尾翔「洞窟や岩屋にみる不動明王・弁財天―群馬県・西上州山地の滝場を中心に―」(『日本の石仏』第八十四号 冬 一九

九七(平成九)年十二月二十五日)等、多数参照させて頂き、学恩を賜った。

(11) 前掲注(9)と同じ。

(12) 今野本證「『毘沙門天』信仰入門―その教え・功德・ご真言―」(『大法輪』七十六巻十二号 二〇〇九年(平成二一)年十二月一日)

(13) 新勝寺編「成田山史」(成田山開基一千年祭事務局 一九三八(昭和十三)年)

(14) 石田瑞磨「例文 仏教語大辞典」(小学館 二〇〇四(平成一六)年十二月二十日第一版第二刷)

(15) 前掲注(4)と同じ。

〔付記〕 鏡花作品の引用は岩波書店版『鏡花全集』(昭和六十一年九月から平成元年一月)に拠り、漢字は新字体に改め、ルビは省略した。また、英文題目については、本学職員・柴田広志氏に御教示頂いた。この場をお借りしてお礼申し上げます。

(もうおか てつや 文学研究科国文学専攻博士後期課程満期退学)

(指導教員・坂井 健 教授)

二〇一五年九月三十日受理